



先日、実家の竹林の端に生えている大きなナラの木が強風で折れた。そこは村の墓地のそばで、折れた木が他家の墓の上に落下して、墓石を壊してしまった。申し訳ないと思いつつも、今後どうすればよいのか途方にくれた。そこは山の斜面で竹林が自生し重機は近づけない。結局、森林組合に頼んで人の手で伐採してもらうことになった。なぜこんなところに木が生えるんだと腹立たしかったが、ナラはただ一心に木の生涯をめがけて生きているだけである。いっぽう実家の庭にも樹木が多く、なかには樹齢百年近いものがある。以前は毎年、庭師に剪定を頼んでいた。剪定を怠るようになると、木は際限なく伸びて屋根を傷めたりする。古い家を守るには、庭木の剪定、雨どいや屋根の修理、水まわり(排水溝)の管理がとても大切である。落ち葉で雨どいや排水溝がつまる、台風や雪で瓦がずれる。そのままにすれば、雨漏りや湿気の増加、ひいては家の腐食につながっていく。ひとつひとつに丁寧に対処すれば大きなトラブルは起こらない。だが、長期間放置すると、重症化して取返しがつかない。何だか、人間の病気とよく似ている。

### ▼旅をする木

私の好きな作家に星野道夫がいる。若くしてアラスカに渡り、アラスカの自然をとりつづけた写真家で、オホーツクで熊に襲われ43歳で命を落とした。彼の著作に「旅をする木」という作品がある。アラスカのお話、鳥の落としたトウヒの種は川沿いの森で芽をだし大木に育つ。春の雪解けの洪水で木は倒れ、ユーコン川からベーリング海へ、そして北極海流にそって遠くツンドラの海岸まで運ばれる。打ち上げられた木は一匹のキツネのテリトリーとなる。キツネを追うエスキモーの猟師は罠をしかける。トウヒの木の果てしない旅は、原野のエスキモーの家の薪ストーブの中で終わる。無人の森と川、そして木の一生を彷彿とさせる名品だ。

今回、墓石を壊した件(くだん)のナラの木も、そういう旅の途上だったかもしれない。木の一生があるとすれば、日々の風雨はあたりまえ、一部が折れても幹

が残れば復活できる。根づいた場で、木はその本性をめがけて生きているだけである。

### ▼あるがままに、とはいかない

そんなことを考えていたら、なんだかナラの木に申し訳なくなってきた。昔の人は里山として竹林や山林を手入れしつつ面倒をみていた。筍や山菜をとり、伸び過ぎた木をはらう。そういう手入れをしなくなると里山は荒れていく。手入れが里山を守り、里山が私たちを育てた。竹林で倒れたナラは、私と里山との関係そのものを、無言で問うているのかもしれない。私が小さい頃、毎日のように里山を見守り、庭木を大切にしていた祖父を思い出す。折れたナラの木や荒れはてた竹林をみて、亡き祖父のことをすこし羨ましく思うのである。



鳥取大学医学部  
地域医療学講座  
教授

谷口 晋一  
(たにぐち しんいち)